



L. J. Davis



永言之道雅俗殊製和歌變為連歌連歌變
為俳諧時運之使然不能不如是和歌宗雅
連歌以雅適俗俳諧以俗通雅而至言志寫
情合諸無邪則古今一揆彼此同歸何復論
雅俗於其際為方今俳諧者流日昌月盛所
在結社宗派蔓延玷墜二歌門戶亦得時運
之數也耳雲南櫻井氏為州豪族世嗜俳諧
今茲庚申丁其先人十三回忌辰乃募同社

及四方集俳諧若干首編作一冊以充追薦
蓋邦俗或遇凶人忌辰大會同友義故共修
其生時所好事緊謂追薦但於其事有韻不
韻如文字書畫韻也如音曲棋奕飲食諸般
雜技不韻也今以俳諧為追薦是追薦之極
韻者豈不謂之盛舉哉冊成徵序于予予未
識櫻井氏然有聞其先出攝之名將塙直之
家系連綿所謂於今為庶為清門者加之富

而不驕好周贍貧弱屢蒙 邦君嘉獎想傳
家有訓為善是樂私心欽嚮者久矣又見斯
盛舉不敢峻拒遂書鄙辭并于冊首若夫所
載佳句金聲玉振讀者知之不待予言

萬延改元庚申初冬朔

苔洲天鱗識

常於又あらそそむるはら

子活居七

隈 ありき 月のまき 松の枝 雪の白

新葉のまき 雪のまき 築城の 村の

あゝ口強 ありき 雪の 虫の

あゝあゝと 撥る 雪の 豆磨 糸の

雪のまき 雪のまき 雪のまき 雪のまき

市へ出る 紙の表の紙うら
席 藤よりよく 強ういふく
口上も ぬ多うれい 忘せうち
やうきううううううう
涼しうの 暑きまの 奇衆を
夏の ぬいぬい ぬいぬい
さし月よ 斜柱をの おき陸し
親 吾 漢の ときめい 紙 重

川 女 川 女 川 女 川 女 川 女

新米のお 桶をばりてやう
少しぬいぬいぬいぬいぬい
炊かぬいぬいぬいぬいぬい
活きたくぬ 藤よ 海苔とる
出代ゆきとに みる ぬいぬいぬい
相の 算筒を 求るもよし
重物 ぬいぬい 眼鏡の ぬいぬい
臺は 遠く ぬいぬい 川

川 女 川 女 川 女 川 女 川 女

蒼拾子出〜とり〜人〜ら〜に

志のふお〜む〜さ〜ゆ〜け〜遠

さひ〜る〜一〜二の橋の日〜り〜

空旅離〜う〜心〜る〜の〜さ〜

洞を人をおら〜風炉裏の自在様

さ〜さ〜と〜あ〜ら〜の〜光〜る〜板〜

小左うせ〜お〜ま〜様〜の〜有〜清〜し

わ〜の〜音〜然〜ふ〜う〜き〜学〜村

々

め

門

々

め

門

々

め

刷りけし程の香味ひや〜

平家のあられさ〜その〜出

旅籠屋を世〜も〜比方のみ〜

花馬の程を折〜さ〜

志〜さ〜き〜を〜ま〜う〜け〜の〜水〜汲〜

過〜日〜毎〜終〜と〜の〜な〜ら〜り

門

々

め

々

め

門

那美の子はけきせまふ

岩谷より下流の河にけき

橋井氏の 芳館

あつらひをいせま

是れもそとにけきの河

試さるる友の けき

籠中、其の書を運ぶる

河通前、此の河にけき

世門

村女

白

川

此の河より、此の河にけき

此の河に、此の河にけき

此の河に、此の河にけき

此の河に、此の河にけき

此の河に、此の河にけき

此の河に、此の河にけき

此の河に、此の河にけき

此の河に、此の河にけき

白

白

白

白

白

白

白

白

相海ハ少シ香々もほつゝ

四

皆さく元あく是くし木給為

為おりる着板底を光ら

忌日くハ被謝入々利

月の夜おとる吐の返く

秋のあうさをやう相捨

そのいらのまにんきさうれをねん

家とひくよくうちひさき

門 白 女 門 白 女 門 白 女 門

まゝいそ太のつゝかやう

魚のまゝ中々遊ふ旅振

將基えんをみるるよ冬の日ハ

相の火桶のゆるきをさ

よハ返りや吹くまゝと後述し

その志り形よ 禿 さくや

二三日えくぬ後ハ相へ行り

静まりえく弱市能あ

門 白 女 門 白 女 門 白 女 門

送燈

学活居士

水も人形もきぬ月夜うね

柳もまふ山ゆきも成るる

人形もきぬも変りて救生云

極よ極うけく小春の晴しけり

露ももや内もたみし川の影

石舟

情も結のけきや春の山

松寿

朝もやうのうらぬ物まじし

馬坊

あつらの中も結る日なり

東明

是も葉もえらりや秋の草

弓抄

何をも遊ぶ子休る月夜會

西女

数寄家入りてきく山の時を

繪白

水もやなるとやうにまをり

花曉

ゆくゆくやあつらぬ人の新木履

松菴

あつたつて 喉や小葉の控傳り

秀然

あつたつて 静き御しる 是う如く

吾人

水かけし 石灯籠やまじりくは

光葉

結ひゆく 花をく おきたきと 嫁う如く

大淵

ちのくくしと 一草野や 畠の 菘

米子

ふしあわす 雪古屋小 おまひたり

佃夢

家づくに 咲く 花をく 一葉の 花

露月

まゆまゆと やしと 花をく やく 月の 有

喜瓜

つらみたる 盤の 衣や けし 月の 花

方月

はらみたる 花をく 花をく 花をく 花をく

馬松

掬ひたる 花をく 花をく 花をく 花をく

茶室

花も 花も 花も 花も 花も 花も

梅直

るま 花も 花も 花も 花も 花も

岐山

一志 花も 花も 花も 花も 花も

半虫

茶栗や 芽 花も 花も 花も 花も

如松

花も 花も 花も 花も 花も 花も

結尾

麻売のふきを秋のふしめが

九和

海士の家もやまねうたに夏の間

梅堂

ゆくそそあせしし月のそそ

可孫

海もふ花もき水の月ねえれ

九田

月とよひ獨おくらもこもるる

一子

重方とはおきひうけまき戸只

朝霧

冬うきやあちらむまきのもんが家

比乙

舟の畔人きはうもなるる

怪了

舟のつふうきやみる清水水

内海

茶畑のふりき中や梅の花

此川

石井や梅のふりき梅の花

瓢英

るの月人きはうもなるる

蕉畫

名月や映りなりくる海の花

湖峯

清さる露もあうきう茶の花

依静

春いもふのふりき梅の花

る水

海もふりきやぬもむ花水

曉松

立秋をおぼしめし一考の世の中

松海

丸く揃ふ草らふ成ぬ秋 余

唐平

何と先もなき初夏のほしあけ

梅里

舟うれしわさびもせんきあはる

百九

川水やその花さうく襟裳ら

幸也

梅白晴とあひぬ暮の海さうら

清来

明生らういりさるるあうりや夕雲

碧松

去来のみし歌をよみの春初め

素号

蓮花城の露もやこれ月の影

是名

水鏡昔月流るるまきとわ

括有

昇る能くそよまらぬや柳花らり

如く

松花を又そ我と一をうきんたり

丹玉

月うける工先や林の植とら

春岳

暮のうき人さうちをさうりり

洞雲

浪たらし月よ静なるあうりり

雲峯

昔はを学ばしうれし冬 露

吳海

梅きくや日初もつくと雪も降

素雄

瀬の初もなき砂川や夕栂

叔兔丸

夏草やけらむとくも魚の相

茶明

わの州や深山の雪もたれなうら

月原

朝くや春田まうら山あはし

穂く

花垂りて扇をつらふほかに花

松里

春の色は流氷の雪や仰りて

牛郎

いんまきうららの中を紅花

珍島

秋萩やむいふりし人の声

里瀬

初雪まふ雪もあけさるる

文龜

楳花火や妙な楳子の花明り

一甫

船の石は原もあきし氷室を

冬冬

初雪や竹花もあけさるる

序阿

志らくし初雪もあけさるる

子守

日一丈あやめ五尺の白ひうれ

壹は

立待のやまもあけさるる

ほ月

清うのや 竹の葉まむ 朝の露

まは

まよや さらさらはくく 山家此

和人

能うもの 七字法所へ 何ううたり

行物

見字法若し 能前小 権委まうを

席へくも 蓮のうへ あり月の空

寸籠

あまのり ちのふ 是候け 塚の前

なつめ

名うの 城うよ 星のひり 中 秋能 宵

破月

有影を 我も 去りて 六つ 能りく 以

そら 中 たらめ

晴らん 中 能 五日 父 字 法 若 士 寂 照 意

まのれを 忍 所 の 原 能 あり ち 拍 子

極き 一 句 ち ち ち ち ち ち ち ち

山うけの 古し あり 人 ち ち ち ち ち

ち ち

ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち

村 ち

ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち

お 年 い ち ち

山川を 見 ち ち ち ち ち ち ち ち

ち ち ち ち

遊水

多きやと問ふ人を解し津東岬 江戸 為山

口よりふきく母喚と初相見 水若

明のまし一燈灯志ありは 見外

川よりや多分の納涼を 奥好 ら代め

多穂のふ揺籠をまねし 西好 浄世

水まのちらしきに 池後 乙良

晴るあそふ子供のを 三河 完伍

さしんや菘のまたる 宗牛

初梅 蓮宇

そきたりの春のあふ 尾好 而后

海とけのそやあ 志程

たぬるねいな 李喚

子細を 士翁

晴結 大板 潔水

まら 島丸

昔やたくりのふさふさ出づる

去後

可大

をくもるやまをくもるも

洪後

菖池

よつとる日影をくもる

介后

かこひらねをくもる

明后

柿玉

をくもるの静さ水も移る

結前

流峰

江流く人やらまうあらし

結後

梅后

月影をくもるとおとす

石后

青池

そとねを里はくせり

号和

初秋や水も清く

系

梅通

初秋や水も清く

弓后

初秋や水も清く

洪后

初秋や水も清く

同

初秋や水も清く

公集

初秋や水も清く

并舎

初秋や水も清く

聖水

松后

初秋や水も清く

号后

芍薬やあまの口を吹く

石盤

鈴の音よこらるる

木南

水溜り松江の橋の月影

春湖

二峰山ありたて

立竹や袖よりえさるる影

立竹

かた枝の山ゆりゆり

村女

朝の日のあもえゆる

春白

但見尚日

雲州仁多郡

櫻井式蔵板



